

小田原教育

第109号

平成20年9月22日



ベニバナボロギク

ベニバナボロギクはアフリカ原産の帰化植物。

1950年に福岡県で採取され、以後関東以西に広がっています。
茎は太いですが、やわらかく、後下方の葉は不規則な羽状に分裂しています。シュンギクに似た香りがあり、食用になるそうです。
畑の周辺の空き地などに見られ、以前は野菜とされていました。

目 次

巻頭言

「不登校への理解を」	小田原市教育研究所所長	2
1 教育研究所・今年度の事業より		
「不登校対策事業」	教育研究所指導主事	3
2 小さなころみ		
「今日的課題を研究テーマに ～共同研究～」	教育研究所指導主事	4
3 学びの架け橋		
「学びの連続性を大切に ～プロジェクト研修～」	教育研究所指導主事	5
4 教育相談指導学級から		
「充実した教育相談研修講座をめざして」	小田原市教育相談指導学級責任者	6
5 教育相談の現場から		
「認め合う人間関係づくり」	教育研究所教育相談員	7
6 ある教室から		
「小学校における外国語活動～子どもたちに何を育むか～」	学校教育課指導主事	8
7 研究所だより		9・10

不登校への理解を

小田原市教育研究所所長

復帰に向けて

教育相談指導学級では、年度始めに「学校復帰強化週間」をもうけています。これは、「フラッディング法」に近いです。フラッディングは、Flooding（洪水・水浸しになる）に Exposure（さらす）を意味しています。最初から強い刺激にさらすのでリスクも大きいですが、改善した場合の確実性が増すと言われます。この方法は、本人が「意外と平気だよ」と思う体験が必要なのです。また、シェーピング法（形成化法）もよく試みます。この方法は、完全学校復帰までの行動を段階的に設定します。例えば、短時間学校に行き、担任との会話ができるようになる。次は学校行事に参加する。そして、曜日を決めた定期的なテスト登校をする等。順次目標行動を獲得していく方法です。いずれにしても、指導学級と在籍校との綿密な児童・生徒理解の上にたって進める必要があります。

失っても得るものがある

NHKラジオの「こころの時代」で、「筋萎縮性側索硬化症（ALS）」が発症した女性の生き方が放送されていました。この病気は、筋肉の萎縮と筋力低下をきたして、手足を動かすこと、食べること、呼吸することさえできなくなる難病で、会話はわずかに動く目のまばたきです。鳥取大学の学生ボランティアが「アカサタナのサ、サシスセソのシ」と読み上げ、一字一字をまばたきでイエス・ノウの確認をして通訳をしていました。その通訳をとおして話していた女性の言葉に「一つ一つ失っていくが、失っていくたびに得るものもある。目が見えなくなっても心は見えますし、言葉は話せなくても想いは伝わります。そして、身体を動かせること、話せること、物を飲み込むことは、恵まれていることです。」とつぶっていました。失っても得るものがあること、当たり前のこととできていたことが、恵まれていると実感すること、これは、不登校の子どもに希望と今できることのすばらしさを教えるための必要な考え方・生き方に思えました。

ふたつの調査から「話す」トレーニングを

一つは、中日新聞に「中学で不登校だった子がその後どうなっているか」追跡調査した結果が載っていました。3,300人に調査票を郵送し、1,400人から回答をもらっています。（42.4%の回答率です。）20歳の時点で、正社員として働いている人は23%。パート・アルバイトをしている人が31%。専門学校も含めて何らかの学校に通っている人（勤労学生も含む）が28%。そして、学校にも通わず働いていない、何もしていない人が23%です。アンケートに答えなかった人も含めると、何もしていない人のパーセンテージは、もっとあがるだろう。つまり、中学時に不登校だった子のうち、4人に1人以上は、20歳の成人を迎えても何もしていない人になってしまうということを伝えています。

二つ目の調査は、「それでは、職に就かず、求職活動もせず、通学もしていないニートの状態にある若者の実態はどうか」厚生労働省が35歳程度までのニートの実態を浮き彫りにしようとして試みた調査があります。それによると、全体の37.1%が不登校を、55.0%が学校でいじめられた経験をしています。また、ニート状態に対して「仕事をしていないというしろめたい」82.8%、「社会や人から感謝される仕事がしたい」82.5%、とニート状態が負担になっています。そして、苦手意識では、「字を読むのが不得意」19.1%、「字を書くのが不得意」35.6%、「計算をするのが不得意」42.8%、「手先が不器用」47.6%、「人の話を聞くのが不得意」34.7%、に比べ「人に話すのが不得意」が64.4%と突出しています。

不登校やニートの要因は、複雑です。また、人間として自立するためには、多くのことを学んでいくわけですが、このふたつの調査から負担とを感じるニート状態にさせないためには、学校でのいじめや不登校を減らすこと、あるいは打ち勝つことが必要で、そのために、子どもが「話す」ことに自信を持てることは自立のための重要な学びの一つと言えます。



不登校対策事業

教育研究所指導主事

過日、文部科学省から発表された学校基本調査の速報によれば、平成19年度の1年間で学校を30日以上欠席した不登校の小・中学生は計12万9254人にのぼり、2年連続で増加したことが分かりました。

中でも、神奈川県内の公立小・中学校における不登校児童・生徒数は1万102人で全国1を記録し、大変憂慮すべき状況となっております。

本市の不登校の状況についても、ご承知のとおり過去最高の人数を更新しており、不登校対策は喫緊の課題の一つです。各校におかれましては、校長・教頭先生をはじめ、不登校対策推進担当者を中心にした組織的な対応を、引き続きお願いいたします。

さて、このような状況の中、先日、県教育委員会の不登校対策担当者と話し合う機会がございました。その中で確認した今後の方針は、次のとおりです。

- ・県教育委員会としては、今後、各市町村の状況に応じた対策を個別に検討していく方針です。
- ・不登校の人数の減少だけに目を向けるのではなく、病気や経済的理由、その他の理由を含めた長期欠席児童・生徒全体を減少させていく方向で取り組みます。
- ・本市は、全県の状況と比べ、「指導の結果登校する又はできるようになった児童・生徒」の全不登校児童・生徒に対

する割合が低いことが課題であり、復帰に向けた取り組みにも力を入れる必要があります。

- ・不登校児童・生徒のうち、特に欠席日数の合計が30日～89日の児童・生徒への指導を工夫していく必要があります。そのためにも、毎月の欠席調査の状況を学校全体で把握し、組織的な対応が必要です。また、総欠席日数を減らすことを目標にすることで、現場の努力が評価されやすい方向にシフトしていきます。
- ・県・市教育委員会共に、「いじめ」が原因による不登校の相談が増えています。「いじめ」の認識が甘く、状況を悪化させているケースがあるので配慮が必要です。
- ・本市は、他機関との連携や養護教諭・スクールカウンセラー等との相談・指導を取り入れた対応はよくできているので、今後も本市の特色として伸ばします。

以上、市教育委員会といたしましても、他機関と連携し、より望ましい不登校対策を構築してまいりたいと思っております。

夏休み明けのこの時期、例年、長期欠席児童・生徒が多くなる傾向があります。各学校における、より一層のきめ細やかなご対応をお願いいたします。





今日的課題を研究テーマに ～共同研究～

教育研究所指導主事

研究員の先生方による共同研究は、教育研究所の事業の大切な柱の一つです。

今年度は5本の研究を行っています。毎月1回、授業を終えた15時から17時まで、研究日を設定し、2年間の研究に取り組んでいただいています。

□小田原近代教育史の編纂

小田原近代教育史の編纂について検討しています。昭和25年から昭和64年の約40年について研究し、資料編作成の元になる年表作りを進めています。膨大な資料をもとに、国・県の教育史と関連付けながらの研究は大変です。各園・小中学校にも協力を得ながら、取り組んでいます。

□小学校外国語活動に関する研究

平成23年から本格導入される小学校外国語活動に対応するため、小田原市としての年間指導計画や指導のための手引き書の作成、また1単位時間ごとの基本的な活動プランや題材ごとの活動プランの作成などの研究に取り組んでいます。小・中学校の連携を重視し、指導方法や教材・教具の開発にも視点を当てています。

□不登校対策に関する研究

不登校を生む要因や、不登校を出さないための取り組みについて、調査・研究をしています。小・中学校が連携をして不登校対策にあたるような組織づくりや、他機関との連携を取り入れた不登校対策につい

て、事例研究を中心に進めています。

中学校区が抱える課題を解決するための連携を視点とした実践を検討しています。

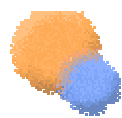
□小学校学習指導法に関する研究

基礎的・基本的な知識・技能の習得、それらを活用し課題解決するために必要な思考力・判断力・表現力等や学習意欲を重視した新しい学習指導要領の考え方に対応していくための小学校の学習指導法について研究をしています。改訂の基本的な考え方をおさえ、教育内容の主な改善事項として挙げられている言語活動の充実などに視点を当てながら、研究を進めていきます。

□中学校学習指導法に関する研究

基礎的・基本的な知識・技能の習得、それらを活用し課題解決するために必要な思考力・判断力・表現力等や学習意欲を重視した新しい学習指導要領の考え方に対応していくための中学校の学習指導法について研究をしています。担当教科と他教科との横断的な指導内容を把握したうえで、習得・活用・探究の多様なプロセスを大切にしたい指導法を研究していきます。





学びの連続性を大切に ～プロジェクト研修～

教育研究所指導主事

プロジェクト研修は、教科指導の専門性をより高め、小田原市の教育活動のリーダーとして活躍していただくことを目的としていますが、今年度、新たに2年間の研修がスタートしました。

学びの連続性を大切に、小・中学校の円滑な接続をねらいとした研究テーマのもと、7部会で研究が進められています。

☆国語科部会

【テーマ】伝え合う力を高める指導の工夫
～表現力の向上をめざして～

☆社会科部会

【テーマ】学習意欲を喚起する学習活動のあり方と小中の連携
～社会との関わりを実感し、自らの生き方を問う社会科教育をめざして～

☆算数・数学科部会

【テーマ】小・中における算数・数学指導の連携を図る
～図形領域における算数・数学的な活動を通した指導方法の工夫～

☆理科部会

【テーマ】理科好きな子を育てる学習の工夫
～小中の理科学習を通して～

☆外国語・外国語活動部会

【テーマ】小・中が連携した英語活動をめざして

☆図画工作・美術科部会

【テーマ】小・中学校を通して、楽しく創造するための図工・美術の学習

☆道徳部会

【テーマ】心に響き、心を動かす道徳授業の実践

各部会では次のようにテーマに沿った公開授業を行います。開催通知を出しますので、ぜひご参加ください。参加受付は、開催通知添付の名簿を研究所あてに提出となります。

教科	月 日	会 場
国語	1/23(金)	報徳小
社会	11/26(水)	酒匂中
算数・数学	11/25(火)	桜井小
理科	10/28(火)	国府津中
外国語	11/21(金)	富水小 (T・T)
図工・美術	12/3(水)	三の丸小
道徳	1/21(水)	千代中



充実した教育相談研修講座をめざして

小田原市教育相談指導学級責任者



今年度実施しました8月の教育相談研修は、19日に17名、20日に30名、21日16名の参加がありました。

いろいろな研修が重なる時期でしたが、午後1時30分からの研修ということで、昼食を簡単にすませ、参加して下さった先生もいらしたようです。

1日目は東海大学の教授による「ロールプレイによる教育相談演習」でした。6人ずつのグループに分かれ、次のテーマでロールプレイを行いました。①朝、お母さんと喧嘩して登校した小6児童と担任の先生、②親のことを聞かない小5児童の保護者と担任の先生、③4月から学校を休んでしまっている小4児童を9月から登校させようとあせっている保護者と教育相談コーディネーター。それぞれ2人組で行うロールプレイを他の4人は観察し、教育相談の仕方をグループ内で協議しました。いずれも学校の中でありがちな教育相談を客観的に観て、考える時間となりました。先生からのアドバイスは「相談者がなぜ私(担任)に話をしてくれているのかを考える」「あせらず、今できることを一緒に考える」「コーディネーターとしてはどこまで話をするか、言える部分を把握しておくことが必要」等のアドバイスをいただきました。

2日目は東海大学心理社会学科の先生の「ソーシャルスキルとエンカウンターを融合させたグループワーク」でした。“対人関係が苦手な子どもにどのようにアプローチしたらよいか”を考える時間にしてください、とご案内をさせていただきました

が、多くの先生方が真剣に取り組んでいる姿にあらためて研修の意義を感じることができました。最後に行ったシェアリングでは、表情、仕草、視線、対人距離等の非言語によるコミュニケーションの大切さを再認識した、という感想が多く聞かれました。

3日目は登校拒否文化医学研究所の先生に「不登校・ひきこもりの理解と対応」と題して、教師と児童・生徒、学校と家庭・親と教師がより良い相談関係を作るためにはどうしたらよいかについて講演をしていただきました。対人関係からの見立てと対応がかかわりの基礎となることや、相手との“共感的な波長合わせ”ができることが大切であるというお話を伺い、自分の教育相談のあり方を改めて見直すことができたという感想を寄せられた先生もいました。

平成13年度から、夏休みに教育相談研修を3回の日程で行っています。

講師の先生方を時節をみて検討し、研修をお願いしています。今回も来年度の企画についての貴重なご意見を参加した皆さんからいただきました。内容の濃い、参加して‘よかった’と思える研修をこれからも企画していきたいと思います。





認め合う人間関係づくり

教育研究所教育相談員

平成 20 年度 7 月末現在、去年と比較して、長欠（月 7 日以上）児童・生徒数が増える傾向にあります。教育相談内容からみていくと、「本人に関わる問題」が小・中学校でトップ、次に小学校では、「いじめを除く人間関係」、中学校では、「いじめを除く人間関係・学業不振」があげられます。

人間関係が希薄になっている現状の中で、豊かな学びの中に、児童・生徒の居場所がある環境づくりが必要と考えます。

そこで、家庭とともに取り組む人間関係づくりにスポットをあててみました。

「アサーション」

アサーションとは、「自分も相手も大切にしようとする自己表現で、自分の意見、考え、気持ちなどを正直に率直にその場にふさわしい方法で述べることであり、また同時に相手が同じように表現することを待つ態度を伴う。」ものです。教育的な視点から見れば、子どもたちが自分の意見や考えを聴く人の立場になってわかりやすくはっきりと言うと同時に、話す人の立場になって、相手の話を最後まできちんと聴き理解しようとするように指導することになります。

「遊ぼう」→「〇〇して遊ぼう」

→「□□公園で、〇〇して遊ぼう」

…少しずつ、相手に対してわかりやすく、丁寧な話し方になっています。

このような会話から、豊かな人間関係がつけられます。

「YOU メッセージと I メッセージ」

母親が、「(あなたは) 何でこんなに遅いの？遅くなるなら必ず連絡をいれなさい。」と言うのは (YOU メッセージ)。それに対

して、「あなたの帰りが遅いので、お母さんが心配だったのよ。遅くなる時は、連絡を入れてくれれば助かるわ。」と言うのが (I メッセージ) です。

I メッセージから見えてくるのは、母の思いであり、会話が続く可能性が高くなるということです。学校内でも、言葉のキャッチボールを大切にし、家庭にも啓発していきたいものです。

「リフレーミングで意欲づけ」

児童・生徒を認める環境づくりは自尊感情を高めるのに効果的です。例えば、よく「おしゃべり」をする子がいます。リフレーミングすると「自己主張ができているね」と認める言い方になります。教室でも、互いに「話す、聴く、認め合う」という環境ができていれば、「自分が認められている、安心できる場所」として本人も考えることができます。

学校や家庭で取り組める事例をあげてみました。是非、構成的グループエンカウンターなどを校内の研修に取り入れたり、相談研修に参加したりすることをすすめます。

平成 20 年度から、各学校では、「不登校に関わる要因による欠席児童・生徒の状況報告書」を提出しています。一日の欠席でも、児童・生徒の様子や気持ちを察していくことで登校支援ができ、児童・生徒との信頼関係も生まれます。

今こそ、豊かな学び・認め合う人間関係づくりをすすめ、児童・生徒たちが、元氣よく登校できるよう、家庭との連携をとりながら支援していきたいものです。いつの時代も、学級経営の充実が基本です。



小学校における外国語活動～子どもたちに何を育むか～

学校教育課指導主事

「こんにちは～！」教室に入ると、子どもたちが元気な声で迎えてくれます。

ある日の小学校の高学年での外国語活動。学級担任による単独の活動です。子どもたちの興味・関心の在りどころを最も良く理解している学級担任が中心となった活動は、小田原市が現在考えている方向性でもあります。

まず、英語でのあいさつ。何より、先生の笑顔が素晴らしい。自らの気持ちのスイッチを見事に切り替えています。

「あ、間違えちゃった！」英語で指示をする中ではよくあることです。そんな時でも、笑顔を忘れず、子どもたちも自然に受け止めています。改めてクラス全体の温かい信頼関係の積み重ねが大切だと実感させられた場面です。

そして、活動の Warm up として、リズムカルでテンポが良い歌を歌います。先生は、息を弾ませながら、笑顔いっぱいの子どもたちと一緒に体を動かします。

続いて、「名刺交換をしながら、コミュニケーションを楽しもう。」「あいさつや簡単な会話で自己紹介をしよう。」という、コミュニケーション活動のめあてを子どもたちと確認していきます。

活動のゴールを示すことで、子どもたちは、活動が単なる「ごっこ遊び」ではなく、意味ある学びなのだと意識していきます。

その後、リズムや手拍子に合わせて、全体・グループ・ペアで前時までの活動

をしながら、次々と相手を替えて自己紹介をしていきます。自分自身で友達とうまくコミュニケーションが図れない子どもたちのために、ヒントカードも用意され、活動に対する不安を取り除く工夫もされています。

さらに、“What sport do you like?” “I like basketball.” というような「自己決定」の場面のある主体的なコミュニケーション活動が展開されていきます。

活動全体を通して感じたことは、先生自身が子どもたちの‘学びのモデル’となっていること、深い教材研究に裏打ちされた活動の場面にさまざまなしかけがあること、子どもたちの興味・関心を喚起する中で、学びの広がりがあること、などでした。考えてみると、これらのことは、すべての教科・領域にも通じることであり、外国語活動は、これまでの授業のあり方を見つめ直すきっかけともなるのです。

今回の活動の中では、子どもたちの笑顔や自然な Eye contact が見られ、外国語活動の目標でもある、積極的にコミュニケーションを図ろうとする子どもたちの姿に数多く出会えたことは、先生や子どもたちからの最高のプレゼントでした。





研 究 所 だ よ り



◆教育講演会より◆

8月27日（水）、小田原市、足柄下郡の幼稚園、小・中学校の教職員のみなさんを対象に、教育講演会が開催されました。今年度は、早稲田大学教育・総合科学学術院教授



河村茂雄先生をおむかえし、「温かな学級経営のポイント～教師に求められるソーシャルスキル～」という演題で、ご講演いただきました。

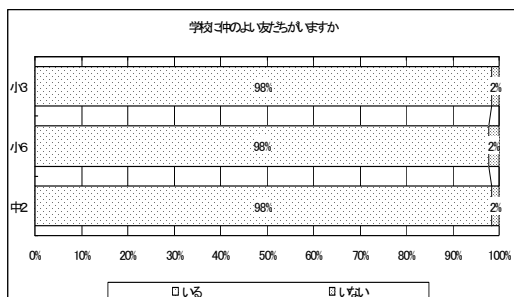
構成的グループ・エンカウンター、ソーシャル・スキル・トレーニング、Q-Uを用いた学級集団アセスメントなど、学級経営について研究をされている先生からは、人間関係を築けなくなっている子どもたちが増えている今こそ、学校教育が果たす役割は大きく、温かな学級経営をしていく力が求められていることを熱く語っていただきました。

子どもたちの状況を把握・分析し、教師がチームを組んで、子どもたちに向き合っていく、明日からの教育活動へのパワーをいただきました。

平成18年・19年度 「小田原市 幼・小・中生活実態調査に関する研究」より

「小田原の子どもたち」の友だちや先生との関わりに関するデータの一部です！

◇学校に仲のよい友だちがいますか

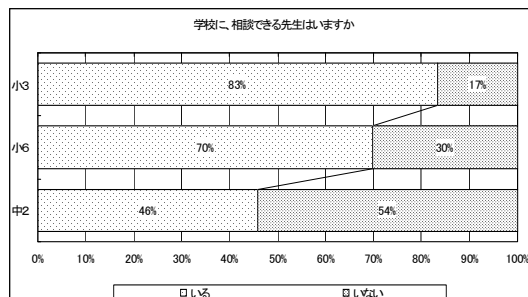


いる…小3 98%、小6 98%、中2 98%

※仲がよいとは 小3→一緒に遊ぶ

中2→気が合う、相談できる

◇学校に相談できる先生はいますか

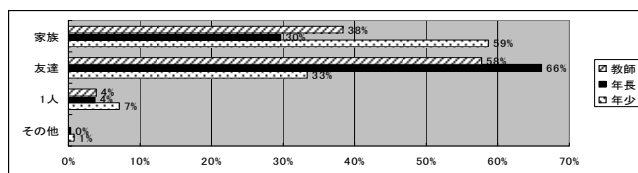


いる…小3 83%、小6 70%、中2 46%

※先生にしてもらってうれしいことは

→勉強を分かりやすく教えてくれる
トラブルを解決してくれる

◇降園後、誰と遊ぶことが多いですか（幼稚園保護者）



年少…家族 59%、友だち 33%、一人 7%

年長…家族 30%、友だち 66%、一人 4%





研 究 所 だ よ り



教育研究所では、今年度も、研究・研修や教育相談などの所管事業を充実させる運営を心がけ取り組んでいきますので、よろしくお願いします。



◆「小田原の自然」活用講座◆

教育研究所の事業の1つに「自然観察会」があります。研究所の刊行物である「小田原の自然」活用講座として、小・中学校の教員等を講師に迎え、年間8回実施しています。今までに5回開催されていますが（残念ながら4回目は雨天中止）、その様子をご紹介します。

第1回 4月21日（土）富水～桑原

平地の自然…あぜ道の花や虫、そして、メダカの観察は、小田原の春を感じることができます。



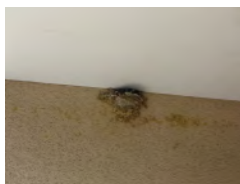
第2回 5月17日（土）江の浦海岸

海岸の自然…磯の生物は大人気。50名をこえる参加者です。様々な種類の生物が見つかりました。



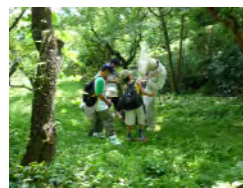
第3回 6月7日（土）市役所周辺

ツバメの観察会…ツバメの観察・調査をします。貴重なデータとなります。



第5回 7月12日（土）辻村植物公園

丘陵の自然…夏の虫を探そうをテーマに2時間を満喫します。この回も大人気。50人をこす参加です。



自然観察会では、自然を楽しむ小・中学生の生き生きとした姿を見ることができます。

仲間と一緒に、一人でも元気に、部活動の一環で、家族とともに、担任の先生と一緒に…と、様々なグループがひとつになって、小田原の自然にふれ、学ぶ機会となっています。リピーターの方が多いのも嬉しいことです。

残り3回、第6回は10月11日 山地の自然（石垣山）、第7回は11月8日小田原の地形（千代台地）、第8回は1月17日酒匂川の野鳥です。

学級で、ぜひ呼びかけてみて下さい。

小田原教育 第109号

発行日 平成20年9月22日（月）

発行所 小田原市教育研究所

発行者 所長 小宮 郁夫

〒250-8555 小田原市荻窪 300

電話 33-1730

研究所ホームページアドレス

http://www.ed.city.odawara.kanagawa.jp/kyouiku_ken/index.html